

皇后が何故こんな地方に來られたかについては、崇峻天皇五年十一月十三日寢殿に於て蘇我馬子の家來、帰化人東漢駒に背中より一突きに刺されて殺された。ときに蜂子皇子三十二才。この皇子が居る限り馬子は枕を高くして眠る事は出来ない。蜂子皇子の命は風前の灯である。父天皇の葬儀も何も考える暇なく、その夜の中に従者三、四名と馬で飛島を脱出した。(蜂子皇子伝記)然し蜂子皇子の行く所、身をかくすところは常陸、越後より西の地域には全くない。ただその当時東国(今の福島、宮城より東北の国)は大和朝廷の支配を受けなかつたので、この東国だけは蘇我氏の権力も及ばなかつた。逃避するところは東国より外になつたのである。

小手姫は東国に逃れた蜂子皇子と一緒に平和な生活を望んで止まなかつた。ために実父大伴糠手も老駈に鞭うつて娘や孫の行先の落ち着きを見届けるべく同行する事になつたのであろう。また大伴糠手としての旅行が危険だったから秦峯能と名を替えたのである。この地方に残る濫觴記や地理誌に、あるいは古書に蚕神機織神の縁起に出て來る秦峯能は大伴糠手の世を忍ぶ替名であるとも記している。ではその当時の旅というのはどんなものだったろうか。もちろん今の様に紙幣とか通貨はない。これら通貨の出來たのは和銅年間で、元明天皇の御代小手姫より約百二十年の後である。旅をするにはみな物であつて、例えば珍しい織布とか器物とかの品物であり、更に高貴の方々の食器とか着替えの様な品物となるとそれだけでも相当の量であつたろうし、その費用だけでも数多の工夫を必要としたのであろう。更にこうした方達の一日の旅程はどの位歩かれたらうか、筆者は一日二、三里位ではなかつたらうかと推測しているが仮りに常陸から來たとして三十里、雨風の日もあつたとすれば十二、三日は掛かる事になり宿の礼食事の代まで品物となるとそんなに多人